

Ⅲ 雇用現場からのメッセージ

MESSAGE 1

<http://www.fancl.co.jp/smile/top.html>

(株)ファンケルスマイル

会長 浅井 輝生さん/指導員 長瀬 誠さん

株式会社ファンケルスマイルは、株式会社ファンケルの特例子会社で、平成11年2月に設立されました。障害のある社員37名（うち重度18名）、指導員4名、管理者5名の職場です。

主な業務には、親会社のダイレクトメールの封入・封緘・発送作業や、商品の梱包・出荷作業、コ



ピーサービス、社内外の清掃作業などがあります。

ここで働く平野邦子さんには、重度（A2）の知的障害が

あります。今回は、この平野さんを戦力として雇用している元社長（現会長）の浅井輝生さんと、指導員の長瀬誠さんにお話をお聞きしました。

平野さん採用の経緯

平野さんはファンケルスマイルの設立に先立つ平成10年9月、親会社にて採用されました。当時の平野さんの仕事は、毎日単純作業の繰り返しで、ほかの社員とのコミュニケーションもほとんどなかったそうです。

平野さんはその後、ファンケルスマイルの設立と同時に、親会社からファンケルスマイルに異動してきました。その頃の平野さんについて、浅井さんは言います。「発する言葉は独り言ばかりで、時々トイレの便器にトイレットペーパーを大量に詰め込むなどという行為が見られました」。

浅井さんはこういう行為は、単純作業と孤独によるストレスが大きな原因であると考え、社内で平野さんとうまくコミュニケーションをとるよう努めたそうですが、なかなかうまく行かない日々が続いたそうです。

きっかけ

平成12年のある日、指導員の長瀬さんは、平野さんがきちんとした文章を書けることに気づきました。長瀬さんは、「文章によるコミュニケーションならうまく行くかもしれない」と思い、平野さんとの交換日誌を始めたそうです。予想は的中し、日誌を通じて言葉では難しかった豊かなコミュニケーションが図れたそうです。そしてこの日誌は約2年間続きました。

この交換日誌をきっかけに、徐々に平野さんの独り言は減り、ある程度の会話も可能になり、与えられた仕事をきっちりとこなすようになっていったそうです。そして段々と職場の人気者になっていったそうです。

浅井さんは言います。「コミュニケーションをとること、誉めてあげること、評価してあげることというのは、人の成長にとってとても大切なことだと思います。彼女が変わったきっかけも、そこにあるのだと思っています」。

平野さんの今

平野さんはもともと漢字をよく知っており、数字の計算能力も非常に高いそうです。また、人並みはずれた記憶力を持っており、一度聞いた人の名前と生年月日は二度と忘れないという特技を持っているそうです。

このような能力が見込まれ、いま平野さんは、ファンケルスマイル内での作業の傍ら、隣接する旧本社ビル1階の売店に立ち、接客やレジ打ちの業務をしています。

お客さんとのきちんとした会話は困難ですが、驚異の記憶力を披露するなどして、かなりの人気者になっているそうです。



* * * * *

浅井さんは言います。「どんな子にもできることはあります。企業が見極める努力をすれば、その子を生かしていくことが、必ずできると思っています」。

<http://www.fsk-inc.co.jp/>

富士ソフト企画(株)

元社長・前取締役相談役 早津宗彦さん

富士ソフト企画(株)は、ソフトウェア企業である富士ソフト(株)の子会社で、平成12年に特例子会社の認定を受けました。



現在169人の社員のうち123人が障害者で、その内訳は、身体障害51人、精神障害51人、知的障害21人となっています。

業務としては、名刺作成、データ入力、ホームページ作成といった情報サービスの他、損保の代理店業務、本社ビル等の管理なども手がけています。

富士ソフト企画(株)設立の経緯

富士ソフト企画(株)は平成3年に設立された会社ですが、早津さんが社長として着任した平成12年、特例子会社として生まれ変わりました。



特例子会社設立時は、身体障害者3名のみでのスタートで仕事もなく、初代社長の早津さんは、どうしたらうまく会社

を軌道に乗せられるか悩んだ時期もあったそうです。

早津さんは、仕事をもらうために本社の様々な部署に頭を下げて回りましたが、その結果徐々に仕事が増えるようになっていきました。

早津さんはその頃を振り返って言います。「当時採用したのは身体障害者の方だけでした。知的障害者の方の実習依頼・雇用依頼もたくさんあったのですが、私自身が知的障害者とどのように接すればよいかわからず、断り続けていたんです」。

知的障害者の受け入れ

そんな早津さんのイメージを変えたのは、横浜市西部就労支援センターから迎えたひとりの実習生だったと言います。「パソコンが得意な実習希望者がいるのでぜひ」というセンターからの熱心なアプローチに対し、早津さんは、「実習だけなら」ということで、はじめて知的障害者を受け入れたそうです。そしてそれが、早津さんの知的障害者に対する見方

を180度変えるきっかけになったそうです。

人並み以上にまじめで、パソコンの操作にも長けているその実習生と接して早津さんは、自分が今までどれだけ偏見に満ちた目で知的障害者を見てきたかということに気づかされたそうです。そして、「知的障害者は十分戦力になる」と思ったそうです。

名刺やwebページの作成も

こうしたできごとを経て、富士ソフト企画(株)では、平成13年から知的障害者の雇用を積極的に進めるようになりました。

現在富士ソフト企画(株)では、多くの知的障害者のある社員が、名刺やwebページの作成等、パソコン



を駆使した業務に携わっていますが、雇用を始めた当初はほかの社員から、「無理ではないか?」という反対の声も出た

そうです。しかし早津さんはそれを制して、知的障害のある社員にさまざまなチャレンジをさせるようにしました。

早津さんは言います。「彼らはやればできます。最初から無理だと決めつけていては何も始まらない」。

富士ソフト企画(株)には肢体不自由や精神障害のある社員も多く働いていますが、そういう周囲の社員が指導したり相談にのったりすることにより、知的障害のある社員のパソコンのスキルは、めざましく伸びていくそうです。

入社前は全くパソコンを使えなかったのに、今ではwebページの作成もできるようになった社員もいるとのこと。

この職場で彼らは、生き生きと輝いて見えます。

* * * * *

過去を振り返って早津さんは言います。「私は障害者雇用に対して崇高な思想は全く持っていませんでした。彼らには、当社の戦力として働いてもらえばそれでよかったんです」。

そんなクールな企業人だった早津さんは今、地元相模原市で、障害者の働く場を広げるためのNPO法人設立に向けて飛び回っています。

